

当館所蔵のチプ(アイヌの丸木舟)

城石 梨奈*

釧路市立博物館では2艘のチプ(アイヌの丸木舟。資料番号：92001, 92002)を所蔵しており、2022年8月現在、いずれも常設展示室4階にて展示中である。現在の博物館



写真1. 移設前の丸木舟展示

が1983年に開館して以来、2艘を並べて立てた状態で展示していたが(写真1)、資料の傷み具合や演示具の状況に鑑み、当初の展示造作を施工して下さった株式会社丹青社様のご厚意とご尽力によって一艘を移設することとなった。移設した1艘(92002)は、アイヌ文化展示室入り口通路に横に寝かせた状態で(資料にかかる負

荷を最低限に抑えて)展示している(写真2)。この移設は、2019年夏頃から打ち合わせを開始し、2020年1月13日から14日にかけて実施した。



写真2. 移設後の丸木舟(92002)

なお、この2艘の丸木舟が旧館時代から展示されていることは、展示中の写真が残っていることから展示の仕方も含めて確認できる(写真3・4)。大型の資料であるため、壁に立てかけたり天井から吊るしたりと、旧館時代も展示方法にはかなり苦心された様子がかうかがえるが、長年に渡る展示によって資料にかかる負荷も大きかったのではないかと想像される。



写真3. 旧館にて展示中の丸木舟(92001)



写真4. 旧館にて展示中の丸木舟(92002)

アイヌ関係資料はその素材も重要な情報であるが、古い時代の資料については素材情報も含めてバックデータが少ないものが多い。当館の資料についても、素材が収集当初の資料カードに記録されているものはほとんどないが、これまでの資料整理の過程で、資料カードやデータベースには目視によって判断した素材情報が記されている(当館OBより聴取)。2艘の丸木舟についても、素材に関する情報は目視による判断と考えられる。この丸木舟についてはこれまでの館外の研究調査によって報告されることが度々

*釧路市立博物館

あったが、素材情報が錯綜している状態にあった(千原氏の報告を参照)。上記の2020年の移設作業の際に木片が出たため保存しておいたところ、2021年度に当館で博物館実習に参加された北海道大学大学院樹木生物学研究室・院生(当時)の千原鴻志氏と指導教官である佐野雄三先生が材質分析を引き受けてくださった。その結果、2艘の丸木舟の樹種が明らかとなったことは、大変有難いことである。その分析手法及び結果については千原氏が別稿で報告をまとめてくださっているため、ここでは資料紹介として2艘の丸木舟について現段階でわかっている情報を記しておきたい。

資料番号92001(短い方の丸木舟)

収集年：不明, 収集地：標茶町塘路,

全長：4.9m, 全幅：0.5m

製作年や製作者、収集年および受入年は不明であるが、寄贈者の情報に越善武氏の名前がある。船縁の内側に木札が貼り付けてあり、ここに「釧路市郷土博物館長殿 市教委〇〇渡辺氏の要望により寄贈 トウロ越善武」(〇〇は判読不能)と墨書きされている。越善武氏(1916-2000)は、塘路観光協会の副会長を務めていた人物で、塘路駅通(明治23年設置)の業務に従事した越善啓作氏の孫にあたる。観光協会の副会長として塘路湖でのベカンベ祭り(1990年代まで実施。現在休止中)の運営にも携わっていたことから、この船は同祭にて使用されたものである可能性がある。ベカンベ祭りでは、祭りの余興として丸木舟で湖上レースをするのが恒例だったという。もしくは、祭りとは関係なく湖で菱の実採集や釣りなどを行う際に個人的に使用したものであるかもしれない。

資料番号92002(長い方の丸木舟)

収集年：1937(昭和12)年, 収集地：釧路町遠矢,

全長：6.5m, 全幅：0.6m

収集地は釧路村(現・釧路町)遠矢、収集年月日は昭和12年6月18日である。博物館へは昭和26年7月23日に当館初代館長の片岡新助氏によって寄贈されている。現時点では収集経緯についてははっきりしない。部分的に破損が激しく、刃物で切り取ったような直線的な欠損部分も2箇所確認できる。(館報No.426の室内昭三氏の巻頭言中にある、片岡氏が鋸を入れていた丸木舟である可能性もある。ただし同エピソードでは、「阿寒町から寄贈されたアイヌの木彫り丸木舟」となっている。)

謝辞：越善武氏の生没年情報は、標茶町博物館の坪岡始学芸係長にご教示いただいた。ご協力に感謝申し上げます。